

審査の結果の要旨

氏名 宮本雄太

幼児期には、園での同年代集団での活動が教育として重要な機能を果たしている。本研究の目的は、4歳児の集まりの時間に焦点を当て、幼児と保育者の対話過程が活動内容によりどのように異なるのかを明らかにすることである。本論文は全4部8章からなる。

第Ⅰ部第1章では、幼児教育での集団に関する先行研究を概括し、4歳児集団を問うことの意義ならびに混合アプローチで研究を行なうという方法を示している。続く第2章では、複数協力園の文脈や観察期間（日常活動場面48日間、非日常活動場面36日間）に基づく研究であることが説明される。

第Ⅱ部では、集まりの時間におけるクラス活動として「日常的な活動」に焦点をあてている。第3章では、保育者の関わりを発話や行為を意味別にカテゴリー化した分析から、活動内容や時期に関わらず、保育者が学級での安心感や関係性の醸成に配慮し、幼児個々の気持ちに応じた形での混乱への対応や幼児の視点を意識した関わりを行っていることを示している。また保育者の関わりへの意識を、修正版 CLASS スケールを用いた自己評定と学期ごとの省察から検討している。その結果、学級雰囲気作りや生活習慣の自己評価は高い一方で、混乱への対応と幼児の視点に関しては自己評価が低いことを示している。第4章では、保育者4名の集団対話分析から、幼児の主体的な参加を意識しているという共通性がある一方で、問題行動への意識や対話をより開かれたものにする事への意識には保育者間での相違があることを示している。第5章では、ゲーム遊び場面、話し合い場面、絵本場面での幼児同士の関わりを会話構造から分析し、1期に比べ2期には発言数と発話連鎖の増加がみられ、他児を観察する視点がより精緻になること、3期になると対話の対象者を選定していく言動がみられること等を明らかにしている。第6章では、学級内での障害児と健常児の関わりを分析し、「他児との関係を模索する」1期、「視野や関係が広がる」2期、「関係が変容する」3期という、期別の関係性の変化を描出している。

第Ⅲ部第7章では、「非日常的な活動」として行事に焦点を当て、運動会と生活発表会を検討している。「運動会」では、活動の繰り返し経験を経て幼児がルールの必要性を理解していく過程を、「生活発表会」では、学級固有の物語を作る際に生じる不和の解決過程を経てイメージが共有化されていく過程を示している。行事では、保育者が方向性を示す必要性和幼児の主体的表現への期待に葛藤しつつ活動に関与している点を示している。第Ⅳ部第8章総合考察では、上記研究を概括し、本研究の意義と今後の課題を論じている。

本論文は、4歳児と保育者の関わり過程について、長期的な観察記述と保育者の省察過程を通して、集まりの場面の持つ意義や課題を明らかにしようとした点に独自性があり、今後の幼児期の教育を拓く可能性を持つ研究であると評価できる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断された。